

今昔の愛の寺

西巖殿寺のすぐ左手には、「写経ヶ橋（bridge of sutra copying）」と呼ばれる溶岩の道があります。この名は、仏教の經典の一節を石に書き写し、それを埋めて祈る写経という風習にちなんだものです。道路が整備される前は、写経ヶ橋は火口へ登るための主要な道でしたが、実際に火山の神聖な中心部まで登ることが許されていたのは僧侶や神職だけでした。一般の人々は、150メートルほど登ったところにある関所までしか行けませんでした。参詣者の多くは、「オンダケサンマイリ」と呼ばれる婚前の慣習のためにこの場所に詣でる若いカップルでした。

この道を歩けるのは、心身が清浄な人だけでした。溶岩の模様は蛇の腹に似ています。心が清らかで無い人には、この道が山中への行く手を阻む恐ろしい巨大な蛇のように見えたと言われています。

オンダケサンマイリをする人々は、春と秋の彼岸にこの寺に訪れました。1860年代後半まで、参詣者たちは寺の西側の開けた場所に住む修験者たちに案内されて山を登っていました。こうした修験者たちは、明治政府が仏教を外国から流入した好ましくないものとして排斥した際に退去させられましたが、その後も絶えずたくさんの参詣者が訪れました。大正時代（1912-1926）の記録には、彼岸花のような赤い着物を着た女性たちが長い列をなして山を登っていく様子が残されています。

縁結び（結婚と恋愛のご縁）は、古くから西巖殿寺の重要なテーマでした。このテーマの現代的なアプローチとして、西巖殿寺は2011年に公式の「恋人の聖地」（プロポーズにぴったりのロマンチックな場所という意味）の認定を受けました。（日本には約140ヶ所の恋人の聖地があります；ある非営利組織が日本の地方活性化と少子化の一環として2006年にこのプロジェクトを立ち上げました。）

この古い寺には、かつて金属製の馬の彫像がありましたが、これは1940年に戦争のための供出で溶かされてしまいました。2022年11月、この馬に代わって、阿蘇山のシンボルであるあか牛がどこか満足そうな様子で座っている像が置かれました。金属は亜硫酸ガスや酸性雨の影響を受けやすいため、台座の説明板は有田焼の陶製です。参拝の際には、ぜひこの牛を撫でて願い事をしてください。

2016年の熊本地震とその後の長引く火山活動の結果、阿蘇山ロープウェイは廃止となり、ロープウェイの運行地域は6年間立ち入り禁止とされました。参拝者数は未だ以前の水準をはるかに下回っているものの、西巖殿寺はこうした近年の取り組みが、より多くの人を訪れるきっかけになることを願っています。